



“夜と霧”の先に

「復興をたんに元に戻すこととしてとらえるのではなく、現代社会の負の部分克服していく大きな歴史的な変革とともに考えていく。復興は何をめざしておこなわれるのか。そしてこの復興の過程に私たちいかに結集し、連帯していくのか。このことのなかに近代以降の時代を支配した思想やシステムを解体していく萌芽がある。」

(内山節『ローカリズム原論』より) ▼東日本大震災が発生してちょうど三年。この正月、気仙沼の復興屋台村に足を運んでみた。南町復興商店街から屋台村まで約1km、何もかも水に流され、更地が続くばかりで街頭もない漆黒の暗夜を歩いたが、厳冬というのに異臭が鼻をつく。先週は福島県での会議に参加してきたが、地元の話では、風評被害による農産物販売不振の状況は一年前とまったく変わらず、特に西日本、北海道では売れないという▼復興が叫ばれながらも復旧すらままならず、とても復興には及ばない。

その復興への期待も、都知事選では、脱原発が争点にすらないというまったくのお気楽かつ自分本位。脱原発の意向九割というアンケート調査結果の白々しさよ▼大震災で命を落とされた方々の無念と、残された方々の生きにくさを思わずにはいられない。V・E・フランクが『夜と霧』の中で語る「人生に絶望しても、人生はあなたに期待することを止めない」を掲げさせていただく。

(土着菌)